
約束のディルニルド

しげる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束のデイルニルド

【Nコード】

N5736M

【作者名】

しげる

【あらすじ】

守らなきゃ。

君との、約束だけは。

様々な生物が棲息する肥沃な大地

《デイルニルド》。

そこで出会った、自分自信に関しての記憶を全て失った少年と、何者かも分からない少女。

少年は、闘う。

自分の信じる、モノのために。

彼女との約束を、守るために。

プロローグ

少年の右手を、閃光が走った。

正確には、あまりにも速過ぎて、まるで一筋の光にしか見えない程の　おそらく短剣くらいの大きさはあろう、巨大な針だった。

駆けているその歩調を崩しそうになりつつも、少年は体勢を整え再び走り出す。

朽ち果てた、何かの廃墟。

明かりは、遙か上方にある天井の僅かに出来た隙間から差し込む太陽光、ただ一つ。

完全なる闇。とまではいかないが……それでも、足元がまともに見えないのは辛い。

人間の彼にとって、この場所はあまりにも不利だった。

夜色を基調とした服のせい、栗色の髪の毛がより一層際だって見える。

「……聞いてないよ」

ボソツ。と誰にも聞こえないように。否、対峙たいじしている相手の耳に達しないように。

視認出来る範囲でやつと発見した瓦礫^{がれき}と瓦礫の合間に、その身を滑^つらした少年は、呟^{つぶや}いた。

これまた栗色の、まるで女の子のように大きめの双眸は、動揺を隠せないようだ。

「……………っ」

左手で、ジャケットの裏側に取り付けられているポケットを必死にまさぐり、探す。

取り出したのは、『解毒薬』というラベルの貼られた、小さな入れ物。

「麻痺毒、か」

今にも消えて、どこかへと吹き飛ばされてしまいそうな程小さな声を、少年が発する。

先程右の手の平を掠^{かす}めた、緑色の液体が滴^{したた}る毒々しい巨大な針を、再び思い起こしながら。

片手だけでその蓋^{ふた}を器用に開け、右手の平に出来ていた、小さな小さなすり傷に、その半液体状のドロリとした、これまた緑色のモノを塗り付ける。

右手はもう、使えない。

力を感じなくなった手の平。
死への恐怖が、一段と増す。これから一時間は、感覚が戻らないと考えていいだろう。

あの小さな傷口だけで、右の手の平が完全に動かなくなってしまう
った即効性。

さらに、「痺れる^{しび}」というよりも、「感覚が無くなる」という効果。
果。

どちらも、かなり上位の麻痺毒に見られる特性だ。

そんじょそこらの村に売られている解毒薬では、そう早くは治る訳がない。

「……………何処に行ったかな？」

治療を終え、瓦礫から半分だけ体を出し、敵影を確認する。
うまく逃げ切れたハズなので、敵もこちらを捜しているだろう。

だが、こちらが敵を相手より早く見つけるのは、至難の技だ。

夜間にあまり目の効かなくなってしまった霊鳥類。

かたや向こうは……………夜行性。

さっきの第一撃の正確さが、それをあからさまに物語っている。

……………カンツカンツカンツカンツ。

刹那、聞こえた。

何かが、鉄の上を歩くような高い音。
それも、そう遠くではない。

奴を視認出来る光が差し込む範囲まで奴をおびき寄せなければ
。

それ以上考えるのは、辞めた。

左腕で、瓦礫の壁を叩く。

コンッ。コンッ。コンッ。

カンカンカンカンカンカン。

敵の音の速度が、増す。

故意に居場所を知らせたとは言えど、やはり恐怖は抑え切れない。
敵の姿を、視認する。

陽の本に曝^{ひら}されたのは……

巨大な蜘蛛の、化け物。

種族《昆虫》。
フォースバイダー
名称。

誰が名付けたかは知らないが、まさにその通りの外見。
足、胴、頭は存在しない。

ただ丸い、何の装甲すら纏^{まと}っていない、とても大きな目玉が一つ
だけ付いている柔らかそうな球体から、四本のガツチリとした装甲
に包まれている太い足が、無造作に崩れて積み上げられ、ビル二階
か三回の高さまで天高く聳^{そび}え立つ鉄骨の山を、器用に這い回ってい
た。

全長、三メートルはあろうその巨体は、明らかに成体。

「ムールの工場だった廃墟に、フォースパイダーの幼体がいるらしいから捕まえて来てくれ」。などと言った依頼内容と、明らかに違う。

念を入れて、敵の情報を集めておいてよかったと、心からそう思う。

敵　フォースパイダーは、その巨大な目玉を回し、こちらを探っているようだった。

まだ、見つかったはいないようだ。

上方からでは、この瓦礫の隙間を確認するのは、きっと難しいのだろう。

あの針を一本精製するには、発車してから五分程必要と、この前めくった昆虫万科に書いてあった。

地面に突き刺さった針を凝視し、次に奴の体を見る。

目玉の下に備えられた発車口に、針は無い。

まだ精製はされていない。

奴が気付くよりも早く。

三十秒。かな。

タイムリミットは、少ない。
次に気付かれた時が、勝負。

そして、それはただ、獲物を探していた。

先程から続いているこの沈黙。

向こうのここへとやって来た事情など、知った事ではない。

ただ生きるために捕らえ、喰らい、そして育つ。

蜘蛛の化け物 《フォースパイダー》にとっては、そのあまりにも単純のサイクルの中の、たった一匹にしか過ぎなかったからだ。

眼球を再度、ぐるりと回す。

捕食動物は、逃げたのか。

それとも……隠れている？

下に降り、詳しい探索をそろそろ開始するかと、それが歩き出そうとした、瞬間。

コツンッ。コツンッ。

沈黙が、消える。

捉えた。

本日の昼食を、捉えた。

耳などは退化しているため、音による空気の振動を敏感に感じ取る発達した肌。

それが知らせた、獲物の足音。

それが聞こえた 否、感じた右上の範囲に、眼球を即座に向ける。

だが、おかしいのだ。

そこにはなにも……数分前に視認した、栗色の目印が、ないのだ。
と言うよりもそこには、本当に何もないのだ。何も。
さっきの音は、一体。

カァンッ!!

再び、大気が、震えた。

それは先程よりも大きく、そして確かな振動で。

よく見れば ただの石ころが、コンクリートの上を跳ねている。
さっきの音は、罔として使用されたのだろう。

だが、今度こそ……獲物だ。

先程見かけた二足歩行の、「最も弱き種族」。

遙か後方より聞こえてきた振動が、それを何よりも告げている。

わざわざこちらに居場所を知らせてくれたのか。なんと間抜けで、
それでいて馬鹿な生物だろう。

その敏感な球体には分かる。

その音が、とても離れた場所から発生した音である事が分かる。

そのために。そのためにだけ進化したのだ。どんなに些細な振動
さえも逃さずに、敵を捕食するためだけに。この装甲を持たない、
この体は。

四本の足を使い、すぐさまに体の向きを転換する。

時間の単位を使えば、その巨体に似合わず、三秒もかからなかっただろう。

それだけ、この化け物は強かったのだ。

殺してくれる。

今度こそ、捉えた。

栗色の髪。栗色の双眸。夜色の衣服。

もう逃がすものか。

……だが、なぜだ？

それなのに、どうしてだ？

違和感。

これ以上はない、違和感。

どうして、どうして。

こんな眼前に、コイツの姿があるのだ！？

目を、見張った。

どこかあどけない栗色の少年は跳躍したのだ。

高く高く。速く速く。

自らが思い描いた軌跡を。

その通りに築き上げたのだ。

その並外れた運動能力。
一つ目の昆虫が知る、「最も弱き種族」の力などではない。
ここまで跳躍したのだ。
この、人間ごときが。

「……ゴメンね」

その口が告げる。

もはや目と鼻の先となった獲物の顔に、漂う哀愁。
不意に掲げたその左手には、どこかで見たような、毒々しい緑
が滴る短剣並の針。

「僕だって　生きたいんだ」

トスツ。と、体に小さな振動。
そして襲う、体の大きな異変。

目が。体が。足が。

まるで自由が効かない。

支えていた四本の足が、鉄骨から離れていく。
ヒュウー……と音をたてて下を落ちていく、巨大な昆虫。
それから、ワントンポ置いて。

「……あつ、どうしよう?」

苦笑混じりに、少年が言う。
完全に、宙を舞っている、その体。
降下を始めたのは、それから間もなくの事で。

「う、うわあああー……！！」

ドオッスン！ という巨大で鈍い音に続き、ドスン。
横たわって、もはや動かない巨大な昆虫に、栗色の大きめな瞳の
少年。

決して死体などではなく、ちゃんとそれは生きているモノ。
あの高さを真つ逆さまに落ちて、それでいて、彼は生きていた。

ただの人間とは到底思えない。

そのほつとした顔は、実年齢よりも一、二歳ほど、若く見えてしま
う。

「い、生きてた……」

急に現れた、安堵感。
徐々に遠退く、恐怖心。

気付けば、少しだけ感覚が戻ってきていた右手を、そっと、優しく握り締めていて。

「生きてる」

右腕を、天へと突き出す。

握った拳は、崩さずに。

光の差し込む、亀裂に向かって。

何かの糸が切れたかのように、ふうー。と肺の淀んだ空気を思いっきり吐き出す。

吸い込んだ空気も……やっぱり淀んでいただけ。

今日も僕は、生き延びたんだ。

この世界を。

この瞬間を。

不意に体中を吹き抜けた風は、彼に心地よさを感じさせていた。

Act・1

季節的には、初夏。と言った所だろうか。

春に咲き誇った木々や花々の大半は枯れ、そして散り、辺り一面が徐々に緑色へと変わって行く季節。その始め。

「……暑いなあ」

まだうだるような暑さではないのだが、それでも額に滲む汗に変わりはない。

必死に吹き出るそれを拭いながら、少年はため息をついた。

どこまでも深緑が広がる、若々しい大地。

木々が作る日陰の恩恵を受けながら、その少年は、その中を一人とぼとぼと歩いていた。

……イヤ。

正確には、二体と言った方が正しいのだろうか。

疲弊した足取りで歩く、人間が一体。

その少年が引いていた、木材に車輪を取り付けた運搬用具　リヤカーに積まれた、四本あるその足に、大きな目玉。艶やかな球体を痙攣させ、動く気配を全く感じさせない蜘蛛の化け物　フォースパイダーが、一体。

「重過ぎるよ……これ……」

とうとう、疲労が限界に来たのだろう。

その場にぺたんつ。と、尻餅をつくように座り込んでしまった。

「なんとか捕まえたはいいけど……。持って帰らなきゃいけないって事、完全に忘れてた……」

再び、はぁあー。と、大きなため息が聞こえる。

栗色の無造作だが、落ち着いている長めの髪。

これまた栗色の、まるで女の子のように大きめの瞳に、中性的な、どちらかと言えば男の子寄りの顔立ち。

十代の少年によく見られる細めの四肢に、夜色の半袖のジャケツトとシャツ。

身長は、百六十センチを越えたくらいだろうか。

「……行かなきゃなあー」

またまた、ふうー。とため息。

どうやら、少年の癖らしい。

再び地面を踏む音を奏でる。

この曲がり角を曲がれば、看板が見えてくるはず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5736m/>

約束のディルニルド

2010年10月12日02時35分発行